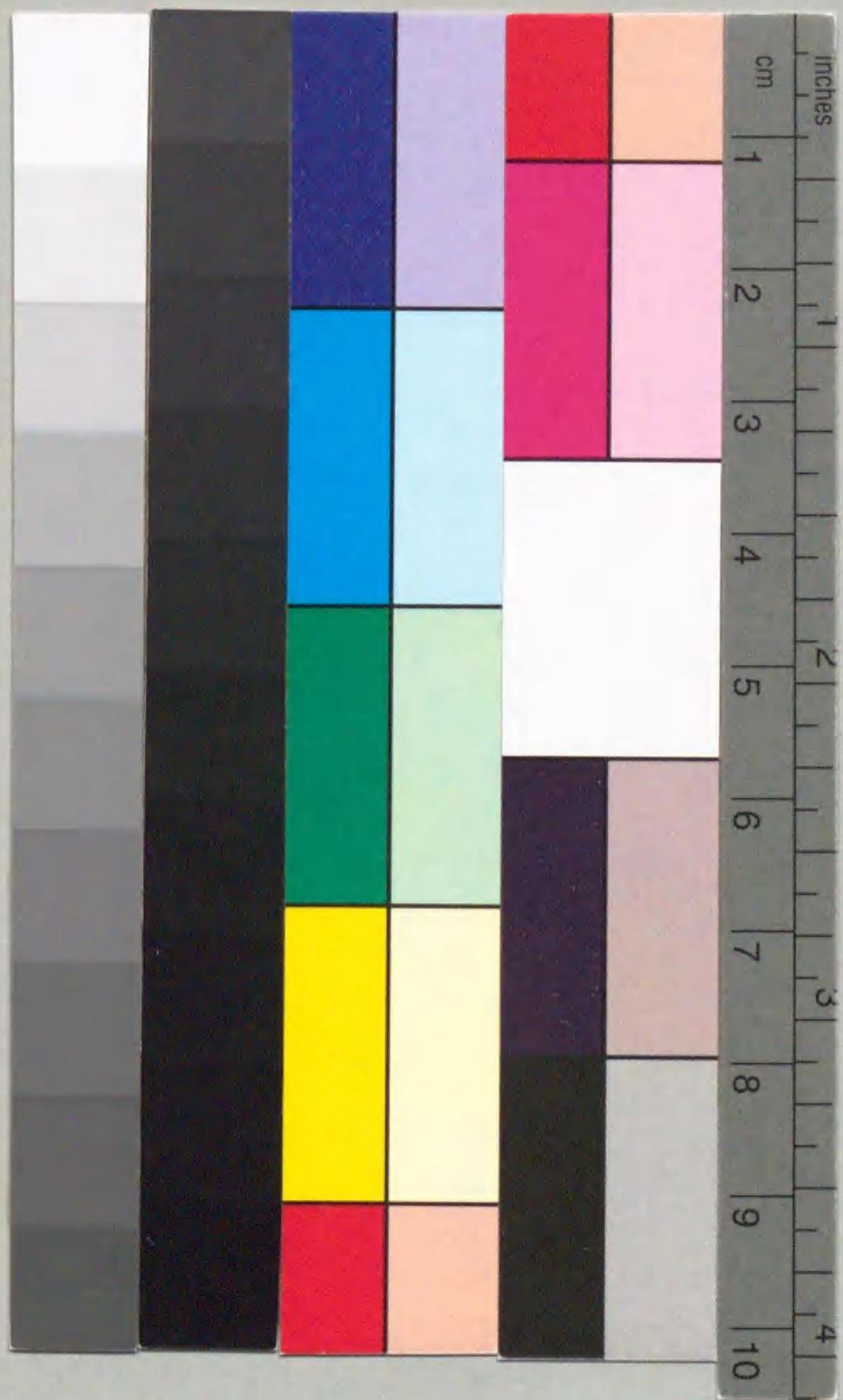


918.6  
W38b



00265184









牧水全集 第二卷

牧水全集 第二卷





(夏年八正大)



265124





(秋年元正大) てに 郷故





(夏年四正大) てに崎三浦三州相



わかことのやうにはあらねこちやこの  
と千と歳になふといふなり ね水

短冊(大正六年筆)

夏草の茂みがうへに伸びいでい  
ゆたかにふひく山巾りのサ化 ね水

(昭和二年筆)

梅梢のよき授け風はまかそわに  
あから流えくうす雪のふし ね水

(大正七年筆)



第二卷歌集目次

みなかみ (五五六首)

故郷	三
黒薔薇	四二
父の死後	六二
海及び船室	七五
酔樵歌	一〇四
秋風の歌 (三七七首)	
夏の日の苦惱	一四四



砂丘 (一九七首)

朝の歌 (二七三首)

秋日小情……………一四九

秋風の歌……………一五九

病院に入りたし……………一六九

秋風の海及び燈臺……………一七六

夜の歌……………一九四

さびしき周圍……………一〇一

山の雲……………三三三

三浦半島……………三三七

曇日……………二四九

白梅集 (二二二首)

秋より冬へ……………二七九

春浅し……………三二四

残雪行……………三三五

夏の歌……………三三七

秋の歌……………三七二

冬晴……………三七九

春浅し……………三九七

さびしき樹木 (二〇〇首)

窓……………四一九

夏の疲勞……………四二四



妙義山……………四三二  
 溪をおもふ……………四四〇  
 さびしき樹木……………四四四  
 北國行……………四五九  
 秋居雜詠……………四七一

溪谷集 (三〇四首)

秋の曇冬の晴……………四八一  
 秩父の秋……………四九六  
 上總の海……………五二六  
 伊豆の春……………五三九

歌集



みなかみ



本書を亡き父に捧ぐ

本書の初めに

本書には大正元年九月ころから詠み始めて、翌二年三月に及ぶ約半年間の作歌五百餘首が輯められてある。即ちわが前歌集「死か藝術か」に續くものである。その半ヶ年を中心前後約一年間、私は郷里日向國尾鈴山の北麓に歸つてゐた。父の病氣、父の死亡、及び久しくうち捨て、おいた家事の整理などに烈しく心を痛めながら作つてゐた歌である。分たれた五章は歌の出來た時の順序を示したものである。なかで、初めの一章などは從來の我が詠みぶりと大差がないが、次の「黒薔薇」以後に及ぶと、よほど其處に變化が起つて來てゐる。

この變化に就いて自ら多少の説明を加へたい心地もするが、今はまだその時でないと思ふ。そして此等の作の價値



はとにかく、斯くの如き傾向の生じたことは、私の歌の歴史にとり強ち無意味のことで無いと私は自ら信じてゐる。尙ほこの事に關しては廣く一般の批評意見を聴きたいものと望んでゐる。私の心中に斯ういふ變化の起りかけてゐたのは決して昨今のことではなかつた。然し、昨年偶然父の病氣のために郷里に歸つて、苦痛ではあつたが極めて清純な孤獨の境地に身を置くことを得たために、かねてから芽を出しかけてゐた希望が殆んど何の顧慮障礙なくして自由に外に表れて來たといふかたちであつた。單に歌に對するのみでなく、自他の生活に對する考へなども餘程よく變つて來たと認めらるることを、本書の出版に際して私はわが郷里の山河に感謝したい。尙ほ暫く其處に留るつもりであるのであつたが、いろいろの事情から今年の五月また惶しく上京して來てしまつた。折角、彼の深山蒼海の間に養は

れた尊い心持をむざむざ亡ぼして了ひはせぬかと心痛して居る。

思ひ出のために、本書に縁ある寫眞三葉を挿入しておいた。父の寫眞は死ぬる前々年あたりのものである。平常極めて健康な人であつたが、昨年の夏七月急に病くなつて床についた。初め半身不隨のやうな容子で、積年の酒毒であらうと皆言つてゐたが、私が歸つて暫くすると、殆んど全快した。十一月十四日の朝、いつも私は獨りだけ二階の部屋に寢てゐたので、その日も何心なく二階から降りてゆくと、勝手の臺所に丹前を着て父が寢てゐる。朝早くから斯んなところにどうしたのだと訊くと、側にゐた母が、なアに昨夜の飲みすぎだらうと笑ひながらいふので私も何心なく戯談など言ひかけて、やがて毎朝やるやうに裏の山に



散歩に出かけた。二十分間も歩いたかと思はるるころ姪が泣き聲を張り上げて呼びに来た。驚いて馳け歸つてみると父は既に人事不省であつた。しがみついて呼びたてても聞える風はなく、一言をも發せず、惶しく口うつしに吹き込む水をも嘔み下さず、醫者が來て二三度試みた注射も效無く、終に不歸の人となつてしまつた。病名は腦溢血、年は六十八歳であつた。祖父若山健海の長男で、立藏と呼んだ。祖父の代から醫者で、酒を過すのと我がままなので評判はさまざまであつたが、近郷ひとしく彼の技倆をば重んじてゐた。私と違つて彼は甚だ寡言で、飽くまで善良な性質を持つてゐた。そのくせ、幼い山氣を胸に斷たなかつた人で、山林や鑛山などに幾度も手を出して祖父の残していつた財産をば忽ちにして空費してしまひ、後には家宅庭園の修繕をなす餘裕すら持たなかつた。それで、また平氣なも

のであつた。私とは親子といふより寧ろ親しい友達といった様な關係を保つてゐた。永い間の私の不孝に對しても露ばかり怒るでもなく恨むでなく、終始他に對して私を辯護愛撫することにのみ力めてゐた。一度、病氣も快くなつてゐたので、今年の春には兩人相携へて上京する約束が出来てゐたのである。いろいろ大きな病院を參觀し、いろいろな好い酒と料理とをあさることを子供のやうな彼がどんなに楽しんでゐたであらう。考へだせば、いつもの微笑を失はずに冷たく眠り去つた彼の顔が眼に浮び、いつでも涙が流れてくる。相見、相笑ふことの出来なくなつた今日彼に對する尊敬と愛慕とは荒れすさんだ私の胸の中に日ましに深く浸んで行きつつある。「今日の佛ほど、さまざまの人に泣かれた佛は御座りませぬ」といつて泣いてゐた葬式の日の人々のことすら、なつかしく思ひ浮ばれて來る。



第二の寫眞にあるのが即ち父の死んだ家、三十年前に私の生れた家である、石垣も塀も門も庭も何年か前に頽れたままに任せてあつて、頽靡そのものの姿のやうだ。第三は南面の家の庭先からやや東に向つて見た峯と溪とである。溪も私などの生ひ育つたころよりずつと水も少くなり、一切苔の深い岩石のみであつた河床が、山林濫伐から來るといふ毎年の洪水で悉くけばけばしい礫原と變じて、いやな溪になつてしまつた。前面の山は尾鈴山の連山の一つで七曲峠といふ峻しい山なのだが寫眞の具合でたいへん低くやさしく見える。この溪の下流の海に入るところが私の大好きな美々津といふ古い港で、「海及び船室」などに收められた海の歌は大方其處で出來たものである。

まことに郷里坪谷村の一年間は、私にとつて今までにな

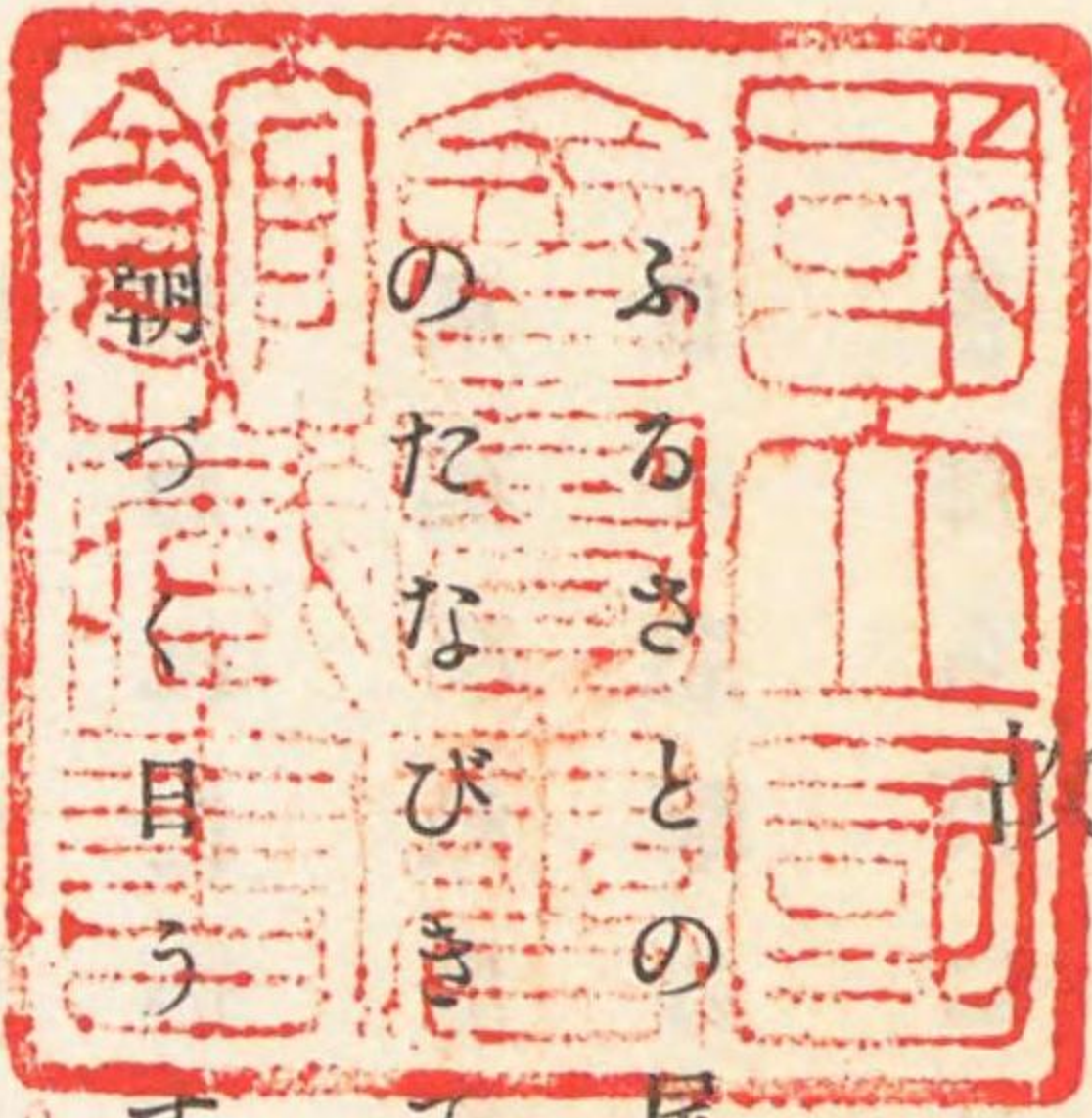
い内省的な、割合に豊かな生活を遂げさせてくれたと思つてゐる。その生活の滴りがこの短いかたちの詩のなかに幾分でも落ちてゐてくれれば幸ひであると思ふ。  
今日は八月二十一日、あと三日すれば私の第二十八回目の誕生日に當る。私の上京後、彼の山の家にうつらうつら病んであるといふ老母の上にも、四六時中おちつきのない時間にもみ追はれてゐる私自身の上にも、靜かな祝福のあれかしと祈られてならない。

大正二年八月二十一日

若山牧水



の秋の朝の日  
ほと照れりわが吸ふほどの風もなき山の窪地  
を酒と酌まうよ  
獨りなれば秋の小山の日だまりの朝の日かげ



て鴨鳥の啼く  
朝の日の  
ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ秋もかすみ  
のたなびきて居り  
すき紅葉の山に照りつちもぬくみ

郷

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including a date and a name.]*



蠟燭のともるにも似む朝づく日かなしき山を  
 わが歩み居り  
 眼<sup>め</sup>や病める涙ながれてはてもなし秋の朝日の  
 裏山行けば  
 秋のおち葉梅<sup>えだ</sup>檀<sup>たん</sup>の木にかけあがり來よと兒猫  
 がわれにいどめる  
 爪延びぬ爪を剪らむと思ひ立ち幾<sup>いく</sup>日<sup>ひ</sup>すぎけむ  
 日々窓晴るる  
 まだら黄に枯れゆく秋の草のかけ啼<sup>な</sup>くこほろ  
 ぎの眸<sup>め</sup>の黒さかな

草山に膝をいだきつまんまろに眞赤き秋の夕  
 日をぞ見る  
 草山にねてあるほどにあかあかと去<sup>い</sup>にがてに  
 すと夕日さすなり  
 樹のかけぞながうなりゆく山の端<sup>は</sup>の秋の夕日  
 に染みつつ居れば  
 阿蘇<sup>あそ</sup>荒<sup>あられ</sup>の日にかもあらめうすうすとかすみの  
 ごとく秋の山曇る  
 ながめゐてなつかしがりしこの山にいまこそ  
 登れなみだのごとく



血吸るとだにの兒はだに這ふにや似む夕日の  
 山をわが攀ちのぼる  
 浮みいで松のみ青くひかり居りけはしき山の  
 秋の夕日に  
 秋の夕日にうかみ煙れる山山の峰かぞへむと  
 してこころさびしき  
 心より落ち散れる葉にものはむさびしきわ  
 れとなる日ありや、森  
 秋の山柴にひそめるだにの兒もいまは夕日の  
 いろに染みゆく

母が飼ふ秋蠶あきごの匂ひたちまよふ家の片すみひなに  
 置きぬ机を  
 ふた親もわが身もあはれあかあかと秋の夕日  
 のかげに立つごとし  
 いづくにか父の聲きこゆこの古き大きな家  
 の秋のゆふべに  
 まんまるに袖ひきあはせ足ちぢめ日向ひなたにねむ  
 る、父よ風邪かぜひかめ  
 父よなど坐るとすればうとうとと薄きねむり  
 に耽りたまふぞ



とりわけて夕日よくさす古家の西の窓邊は父  
 のよく居るところ  
 ほたほたとよるこぶ父のあから顔この世なら  
 ぬ尊さに涙おちぬれ  
 父よいざ出でたまへたすけまらせむこの低  
 き岡越ゆることなにぞ  
 わがそばにこころぬけたるすがたしてとすれ  
 ば父の來て居ること多し  
 さきのこと思ふときならめ善き父の眉ぞくも  
 れる眉ぞ曇れる

親と兒のなかのかなしき約束の解かれぬまま  
 にいま朽ちむとす  
 秋の日あし追ひつつうつる群をおひ父ひもす  
 がら蠅うちくらす  
 二階の時計したの時計がたがへゆく針の歩み  
 を合はせむと父  
 父がのを聞くがつらさにわれもせし咳くせと  
 なりあらためがたし  
 老いふけし父の友どちうちつどひ酒酌む冬の  
 窓の夕陽



どの爺おぢのかほもいづれもみななつかしみな善  
 き父に似たる爺おぢたち  
 かくばかり踏まれてもなほうすすと青き芽  
 をのみふくとすや生命いのち  
 蜜蜂も赤く染まりて夕日さすかなしき軒をめぐ  
 るなりけり  
 痛き玉掌たまてにもてるごとしふるさとの秋の夕日  
 の山をあふげば  
 あかあかと秋の入日にそめられて落穂ひろへ  
 る、姪めいかあらじか

夕日の家かすをたがへて時をうつ古き時計も  
 生きたるごとし  
 なにをかもよろこびとせむふるさとに埋うづる  
 身は梨腐るごとし  
 眼めいつばいに悲しき顔の見えてきぬわれの疲つか  
 勞れのなかより來にけむ  
 壺かのなかにねむれるごとしこのふるさとかな  
 しみに壺の透きとほれかし  
 つるむ小鳥うれたる蜜柑おち葉の梅檀家をめぐ  
 ぐりて夕陽してあり



梅檀の葉に秋のきたるは質たちわろき玉のひそひ  
 そ光れるごとし  
 太陽にむかひしがめつくせるわがつらの皮膚  
 のこはばりも朝はうれしき  
 園には鶏とり蜜柑朝の日枇杷のはな父がたちいで  
 摘める柚子ゆずの實  
 しんしんと頭痛かじらめり、悲しき幻影げんえい、輝ける市街まちの  
 停車場の見ゆ  
 しんしんと頭痛かじらめり、悲しき幻影げんえい、下の關の海峡  
 に高き窓つくる

憎まれ者のわれに媚びむとするところにやわ  
 が部屋に鏡臺を置くといふ姪  
 鰯のみ食ひつつ幾日すぎにけむ梅檀の葉の日  
 日散る家に  
 煙草の灰がぼつたりと膝におちしときなつか  
 しき瀬の音聞えくるかな  
 おお、夜の瀬の鳴ることよおもひでのはたとと  
 だえてさびしき耳に  
 一ところ山に夕日のさせるごとく東京の市街まち  
 をおもひてぞ居る



寸ばかりちひさき繪にも似て見ゆれおもひつ  
 めたる秋の東京  
 數寄屋橋より有樂座見るものごしにこころを  
 なしておもふ秋の市街  
 相模の港津の國のみなといづくもみな秋とな  
 るらむ旅をしぞおもふ  
 菜を洗ふ話なれども夕日のなか若きをなごの  
 聲のよろしも  
 味氣なき夕なるかな眼の前の膳の酒さへ爐の  
 焚火さへ

山に風來ぬ山ぞ鳴る、冬の午後の日うす赤きな  
 かに  
 膝にねむれる兒猫のころにも觸れぬやう心  
 かなしき冬の日だまり  
 窓の前の林に風の吹きすさびけふも啼き啼き  
 すぎし小鳥よ  
 軒端なるちひさき山も鹿の子まだら紅葉とな  
 りて冬の來にけり  
 一りんの冬の薔薇のうすくれなるなつかしき  
 ものにもとるかな



冬の薔薇<sup>きょうび</sup>われを憎める姉の娘<sup>こ</sup>が折りてあたへ  
 しくれなる薔薇<sup>きょうび</sup>  
 わが園の山<sup>くま</sup>梔子<sup>な</sup>の實<sup>し</sup>の日ごと黄<sup>きいろ</sup>くなりまさり  
 ゆき雪も降らず居り  
 くちなしのちひさく黄なる實をふたつにさけ  
 ば悲しき匂ひ冬の陽に出づ  
 わが生<sup>ま</sup>は浪、海のなかなるひとつの浪まつさを  
 の浪ゆたゆたの浪  
 久しくひかりを見ざる眼<sup>め</sup>のごとくそこひ痛み  
 て友のこひしき

爲すことみな悔とならざるなき我が日今朝も  
 新しく輝きてあり  
 薔薇<sup>きょうび</sup>の花びらのごとく鮮かに起きてあり薔薇  
 の花びらのごとく冷たき朝に  
 愛すべきは朝の光線なりまことに光線にむか  
 へる我が疲れし瞳<sup>ひとみ</sup>なり  
 さるにても不思議なるはわが健康かな鐵の碎<sup>かけ</sup>  
 片<sup>ち</sup>のいよいよ黒く輝けるごとし  
 くだもののごとき港よ横濱の思ひ出は酸く腐  
 り居にけり



とある旅館の窓の硝子にうつりゐし秋の港の  
 朱の帆黄なる帆  
 黒き帽子黒き背廣着て街路ゆくとありめづら  
 かに來し友のたよりに  
 さなりげに都は冬のつめたくて汝が戀人も輝  
 きてあらむ  
 健康の完まつたかりせばこのさびしさ消えむかとお  
 もふ、朝、冷えし鏡  
 あはれ悲し玉にくもりのなきごとく健かなら  
 む健かならむ

われを恨み罵りしはてに噤つぶみたる母のくちも  
 とにひとつの齒もなき  
 斯る氣質におはする母にねがはくは長き病の  
 來ることなかれ  
 母が愛は双のごときものなりきさなりいまだ  
 にそのごとくあらむ  
 そそくさと夕陽にかみ小止やみなく働く庭の  
 母を見じとす  
 夕されば爐邊ろへんに家族かぞつどひあふそのときをわ  
 れはもとも恐れき



母にも姉にも對座をいとふ臆病のわれのこころの澄みたるかなや  
 飲むなと叱り叱りながらに母がつぐうす暗き部屋の夜の酒のいろ  
 わづかの酒に酔ひては母のつねに似すくちかろく、夜のかなしかりけり  
 猫が踊るに大ぐちあけてみな笑ふ父も母も、われも泣き笑ひする  
 あはれ今夜のごとく家族のこころみな一いろにあれ一いろにあれ

姉はみな母に似たりきわれひとり父に似たるもなにかいたまし  
 くちぎたなく父を罵る今夜の姉もわれゆゑにかとこころ怯ゆる  
 あはれみのこころし湧けるときならむしみじみものいふ母の悲しも  
 母をおもへばわが家は玉のごとく冷たし父をおもへば山のごとく温かし  
 くづ折れてすがらむとすれど母のこころ悲哀に澄みて寄るべくもなし



ころより母を讃ふるときのあるとき  
 われのいかにかなしき  
 うちつけにもものいふことをも恐れ居るその兒  
 をなほし憎みたまふや  
 なま傷にさはらぬやうに朝夕の世間話にも氣  
 をおく納戸  
 ひとを憚りてわれを叱れる父の聲をかむとし  
 て先づ涙おちぬれ  
 父と母くちをつぐみてむかひあへる姿は石の  
 ごとくさびしき

家に出づる羽蟻の話も案のごとくこの不孝者  
 のうへに落ち終りけり  
 母、姉、われ、涙ぐみたる話のたえま魚屋入り來ぬ、  
 魚の匂へる  
 なせに斯く蜂多きならむわが家の軒のめぐり  
 は蜂ばかりなり  
 斯くおほく蜂に見馴れてはいつしかに友だち  
 のごともおもはるる、冬  
 酔ひざめの水の飲みすぎしくしくと腹に痛み  
 て冬の朝來ぬ



ときどきに部屋より出でて身に浴ぶる冬の日  
光くわうのうす樺いろよ

帽子なしに歩くせつきしふるさとの冬の日  
光のわびしいかなや

母の聲姪の泣くこゑとりどりの肉聲さびしわ  
が家の冬

西の窓の障子の紙が血のごとく夕陽にぞ染む  
父の背後うしろに

鶏とりぬすむ猫殺さむと深夜よひの家に父と母とが盛  
れる毒薬

泥棒猫をころして埋むる山際の金柑の根のつ  
ちの荒さよ

死んだ猫をさげし指さきに金柑をつみてくら  
へどきたなしとせず

ほとほと不要となりし父のテーブルを借りき  
て二階の窓邊にぞ据ゆ

前の山より照りかへす冬の日ひくわう光のしづけき明  
るみ包めり書齋を

その障子もこの窓もみなしめきりて冬の夕陽  
に親しみて居り



椅子ながら山山の間の落日を見居れば、二階、父  
の入り來ぬ

葉よりさらにみどりに透けるちるき蟲薔薇の  
葉に居りき、夕陽に透ける薔薇に

花いちりん葉が三四枚まがりくねれる九寸ほ  
どの薔薇よ、この冬の薔薇よ

薔薇の葉を喰ふ蟲を見出だしこの部屋のなに  
やら明るくなりし思ひす

夕陽のかげちひさき黒き蟲のふん机に散りて  
あり、薔薇に蟲居り

鹿の角を十四五本もなげ入れし古びし箱を見  
いでけり、朝

父が獵りしものなりと云ふ鹿の角眞黒くすす  
け寶石に似る

低聲に卑俗なる唄うたひつつ夕陽の椅子を離  
るるはよき

褪せてちればつぎなる小枝さして置く薔薇と  
われとの冬の幾日

斯くあきらかに秋の日光がわが肌にさせるは  
痛き冷笑に似たり



わが肌に觸るるもの眼にうつるものいづれか  
 痛き冷笑にあらざる  
 信せむとぬがひ信じたりとおもひ思へどもこ  
 ころの何處にか細き風吹く  
 わが朝夕の生活をうすき板のごとく思ひて裏  
 より覗かむとする  
 はたと踏みつけむわが生の地にも斯のごとき  
 冬の夕陽が散りてあるべしと思ふ  
 わが窓に黒き幕來て垂れてあり汝が生を静か  
 にはぐくめよとて

梟のごとくわれを見守るもあり、杜鵑の如くか  
 すめ行くもあり、悔ぞ群れたる  
 起き出でて戸を繰れば瀬はひかり居り冬の朝  
 日のけぶれる峽に  
 今朝もよく晴れたり、今し朝食後の散歩に越ゆ  
 るちひさき冬の山  
 五日がほど讀書に過ぎぬ、つかれたる暗き頭に  
 親しきこの冬  
 静かなれ冬の日、わきてけふ一日、朝よりこころ  
 死せるがごときに



机のうへの二りんの薔薇にも愛憎の湧く日な  
り、眼昏し

こころ怒れば血さへ烈しく身にはうつ寂しい  
かなやわが膚を見よ

青杉の大枝をさせば北窓の机小暗しわれの讀  
書に

山河みな古き陶器のごとくなるこのふるさと  
の冬を愛せむ

十一月三日、今年はずてに天長節の日にあらず、

悲しみてうたへる歌三首

曇りなき十一月三日の空の日のかなしいかな  
や静やかに照る  
かしこしやこの一もとの菊にさへ大御心のの  
これるごとき

野に生ふる草山にそびゆる樹のごときこのこ  
ころもて悲しみまつる



## 黒薔薇

納戸の隅に折から一挺の大鎌あり、汝が意志を  
まぐるなといふが如くに

飽くなき自己虐待者に續ぎ來たる、朝、朝のいかに  
悲しき

新たにまた生るべし、われとわが身に斯く言ふ  
とき、涙ながれき

静かにいま薔薇の花びらに來て息へるうすき  
いのちに夜の光れり

こころづけば鏡に薔薇がうつりてあり、つとわ  
が顔の動けるそばに

ふと觸るればしとどに揺れて陰影をつくるく  
れなるの薔薇よ冬の夜の薔薇よ

ひらかむとする薔薇、散らむとする薔薇、冬の夜  
の枝のなやましさを

はち切るるとき精力を身に持ちたしと呼吸  
をぞとむる、薔薇のくれなる

わが生存力はいまだ火を知らざる如し、油に黒  
く濡れて輝けど



傲慢なる河瀬の音よ、呼吸はげしき灯のまへの  
 われよ、血のごとき薔薇よ  
 悲しみとともに歩めかし薔薇、悲しみの靴の音  
 をみだすなかれ薔薇  
 吸ふ呼吸の吐く呼吸のわれの静けさに薔薇の  
 くれなるも病めるが如し  
 わがかなしさは海にしあればこのごとき河瀬  
 の音は身に染まず、痛し  
 やうやくに馬の登音のきこえきぬ悲しき夜も  
 明けむとすらし

日に蒼みゆく神経質になりぬしにふと心づき  
 ぬ、とある冬の朝  
 饑ゑたる蟲幹にひそめる樹のごとくわが家の  
 何處にか冷たさのあり  
 愛すべきただ一りんの薔薇あり、この日のわれ  
 の静かなるかな  
 斯る孤獨に我が居るときに見出でたる一りん  
 の薔薇を愛でも惱める  
 薔薇を愛するはげに孤獨を愛するなりきわが  
 悲しみを愛するなりき



虚しき命に映りつつ眞黒き玉のごとく冬薔薇  
 の花の輝きてあり  
 われ素足に青き枝葉の薔薇を踏まむ、かなしき  
 ものを滅ぼさむため  
 薔薇に見入るひとみ、いのちの痛きに觸るるひ  
 とみ、冬日の午後の鬱憂  
 悲しみの影も滅びつ、見入りたる一りんの薔薇  
 の黒くしぞ見ゆ  
 古びし心臓を棄つるがごとくひややかに冬薔  
 薇のくれなるにひとみ對へり

聞き馴れては蟲もどこやら鑛物の音するごと  
 し、もはや冬なり  
 愛する薔薇を蝕ばむ蟲を眺めてあり貧しきわ  
 が感情を刺さるるごとくに  
 机の前の夜の山よりまひて來し濃みどりの蛾  
 のとびてやすまず  
 日光が行燈のごとく灯のかげがわが心の光明  
 の世界に似たり  
 灯を消すとてそと息を吹けば薔薇の散りぬ、か  
 なしき寢醒の漸く眠りを思ふときに



わが悲しみは青かりき、水のごとかりき、火となるべきかはた石となるべきかわが煙草の煙のゆくとき、夕陽の部屋薔薇はかなしき鬱憂となる

しづかなる休息、冷やかなる休息、この木漏日のごとき休息

この冬の夜に愛すべきもの、薔薇あり、つめたき紅るの郵便切手あり

ひいやりと腰のあたりがなにものか觸れしがごとくくづるる冥想

疲れしにや、いないまやうやく痛める眼にかなしき朝を見むとするなり

わが孤獨に根を置きぬればこの薔薇の根する日永久にあらじとぞ思ふ

思ひつめてはみな石のごとく黙み、黒き石のごとく並ぶ、家族の争論

ゆふぐれのわが家の厨の喧燥は古沼のごとし、西に高き窓

家のいづくにか時計ありて痛き時を打つ、陰影より出でよ、出でよとて打つ



窓よ暗かれ、わが悲しき孤獨の日に、机のばらの  
 さむきくれなる  
 ついと眼をそらして、つとめの如く薔薇を見る、  
 愛する讀書にも尙ほ耽り得ずや  
 黒鐵のごとき机に身を凭せて薔薇にひややかに  
 眺め入りたる  
 わが孤獨の悲しみにひそかに觸るるごとく、冬  
 の夜の薔薇にうちむかひ居り  
 懷疑は曇れる日の海のごとし、痛きにほひにい  
 のちもまた曇るなれ

昨夜のわれとこよひの我と肉體のほかいづく  
 に係りありて生けるにや  
 あるがままを考へなほしてみむとするところ  
 と絶對に新しくせむとする心と  
 ひとの眼の哀樂はただよく描かれし布の上の  
 つめたき繪なり  
 ともし斯くもするはみな同じ、やめよ、さらばわ  
 れの斯くして在るは  
 いづれ同じことなり太陽の光線がさつさとわ  
 が眼孔を抜け通れかし



感覺も思索もいちど斷れてはまたつなぐべからずつなぐべくもあらず  
 窓に倚れば悲哀は朝のごとく明るく、鳥に似てわが命の影もさすなり  
 窓際は悲しめる女の皮膚のごとし、いないなその如くわれもまた悲し  
 わが腫は涙に濡れてかがやき日に照らされし萬象はみな死にて冷たし  
 陽を浴びつつ夜を思ふはこころ痛し、新しき不可思議に觸るるごとくに

脂肪にや額の皮膚のこはばれる或る冬の日の午後、多き蜂  
 青やかに光れる鎌ひとつ地の上に在り、足跡はあれど人は見えす、眞晝  
 髪延びし後頭部にも居ることし、一疋の蜂、赤いろの蜂  
 斯くばかり明るき光さす窓になにとて悔をのみ思ふらむ  
 この山梔子の實に似ても静かなれかし、何故にわれの斯くあわただしきや



やや深きためいきをつけば、机のうへ眞青の薔  
薇の葉が動く、冬の夜

高き窓より一すぢの薄明り、さすげなれども冷  
たしわが眼<sup>め</sup>

窓は傷のごとし、いためるいのちの上に光射す  
ことを恐るればなり

窓に向ふとき、わが眼古びし蠟のごとくこはば  
ることあり、瞑ぢて居るべし

窓より光線を見るも厭はし、わが眼<sup>め</sup>松の皮とな  
るに似たれば

運命とは言はじ、在るがままのこの一りんの薔  
薇のごとく悲しきもの

薔薇は薔薇の悲しみのために花となり青き枝  
葉のかげに惱める

なめらかにしてあぶらのごとき夜、窓を包めり、  
窓邊には薔薇とわれ

ランプを手に狭き入口を開けば先づ薔薇の見  
えぬ、深き闇の部屋に

あまりに身近に薔薇のあるに驚きぬ、机にしが  
みつきて讀書してゐしが



冬をしかと捉へてわが皮膚の血を注さむとす  
るがごとき寂しさ

言葉に信實あれ、わがいのちの沈黙より滴り落  
つる短きことばに

忘れものばかりしてゐるやうな、おちつきのな  
い男の机の鮮紅薔薇

さうだ、あんまり自分のことばかり考へてゐた、  
四邊は洞のやうに暗い

自分のところを、ほんとうに自分のものにする  
ために、たびたび来て机に坐るけれど

全く自由な絶對境がないものなら、斯うして眺  
むる薔薇はうつくしい

晝は晝で、夜は一層薔薇が冷たいやうだ、何しろ  
おちつかぬ自分の心

と思ふまに薔薇がはらはらと散つた、朝、久しぶ  
りに凭つた暗い机に

ぢいつと薔薇に見入るころ、ぢいつと自分に  
親しまうとする心

薔薇を貫ひに隣家へ姪をやつた、人知れぬ涙ぐ  
ましい心地で



北向きの暗い机にたびたび来ては坐るがすぐ  
読書にも疲れる

斯うしてちいつと夜のばらを見てゐるときも  
心は薔薇のやうに静かでない

薔薇が水を吸ひやめたやうだ、ガラスの瓶びんの冬  
のばらが

しかたなさにばらを見てゐるのかも知れぬあ  
かい薔薇、つめたい薔薇

考へだせばみなからつぽのやうに思へてくる、  
机のうへの冬薔薇の美しいこと

散つてみれば案外な花くわ瓣べんの大きさ、薄さ、あか紅さ、冬  
の夜の机の薔薇

無論さうして働いてうまい物を食ふのもいい、  
さうしてゐる給へ、君はほんとに健康じやうさうだ

さういふこともあらう、さうであらう、何しろ自  
分は自分で忙しい

太陽の光線は地球の表皮だけに機能があるの  
だらうかなどとも考へる

自分をたづぬるために孔あなを掘り、孔ばかりが若  
し残つたら



朝など、何だか自分が薄い皮でもあるやうに  
思はるるときがある

焚火、焚火、焚火に限るやうになつた、このごろの  
自分に最もふさはしい焚火

叔父さん、今朝氷がはつたと姪が呼ぶ、さうか眼  
が痛いほどいい氣持だ、寢床

冷たい、冷たいと心こゝろからふるへて爐のそばに寄  
つてゆく、朝のわが身をいとしいと思ふ

木の切端を投げだしたやうにめいめいの朝の  
膳が並んだ、爐には焚火

ランプの灯は石油のやうな憂鬱で、窓の夜と私  
とにそそぐ

さうさ、鼯鼠むぐらもちのやうに飲んでやる、この冬の夜よの  
苦い酒

眞黒な布きれで部屋を張りつめ、椅子も机も、服まで  
も黒くしたい



## 父の死後

あなかしこし静けき御魂たまに觸るるごとく父よ  
御墓みたまにけふも詣まうで來ぬ

御墓みたまにまうでては水さし花をさす、甲斐なきわ  
ざをわがなせるかな

この墓場のつめたきもなにかなつかしくしきみ櫛しきみの  
木こかけを去いにがてにする

冷たき、見知らぬ境に入るごとくけふもひそか  
に墓場みたまにぞ來ぬ

櫛しきみのみ茂れる墓場、くらき墓場、此處にしもつひ  
にねむりたまふか  
御墓みたまちかづく、墓場小暗き坂みちにこころは黒  
き玉とかがやき  
あわただしく薔薇を摘みきて挿しぬ、父逝きて  
のちのわれのいとしさに  
父の死後、いまだ十日を出でず、わがこころ川原  
の砂の白くすすさみたり  
喪もの家の爐ろ邊へん、櫛火のかけに赤き母が指姉がゆ  
び我が指のさびしさよ



わが厨の狭き深き入口に夕陽さし淵のごとし  
 噤みて母の働ける  
 ものいはぬわれを見守る老母の顔、ゆふぐれの  
 爐邊のうす暗さよ  
 いろいろに考ふれど心に染むことなし、來む明  
 日さへ、おもへば恐し  
 わが幸福の裏には常にわれを見守る冷笑あり、  
 薄き朝のひかりのごとく  
 空にひくき冬の朝の太陽、底無しのみさびしき夜  
 より出でて來しわれ

起きいづれば太陽はとく峰にあり、氷れる溪に  
 のぞみたる家  
 啞を見て笑はずにゐられぬほどに浮きたちし  
 心は今朝の空よりも碧し  
 思ひだしたやうに水仙が匂ふ、水仙が匂ふ、朝の  
 讀書の机に  
 朱欒の實、もろ手にあまる朱欒の實、いだきてぞ  
 入る暗き書齋に  
 明るき山かな、朝の日のさせり、病める鳥かも、木  
 の根にぞ啼く



薔薇を手近に寄せぬ、闇夜の雷鳴に氷のごとく  
 ふるへ居るこの机よ  
 雨のなかの冬の櫛の樹、灯の窓より櫛にむかへ  
 る薔薇のくれなる  
 紺いろの小鳥をたなごころにそつと握り放た  
 じとする、死んだごころ  
 なんとやら頭ばかりが重たうて歩きにくかり  
 ぐつと踏みしめむ  
 飴のやうに粘土のやうに、このごころ成れ、いろ  
 いろに細工してみむ

やす鏡、てらてら鏡、青い鏡に伸びたり縮んだり、  
 我がごころ  
 この繪のやうにまつ白な熊の兒となり、藍いろ  
 の海、死ぬるまで泳がばや  
 きゆうとつまめばびいとなくひな人形、きゆう  
 とつまみてびいとなかする  
 要するにうその話、うたはうたへどわがごころ  
 身にやどらす  
 啼け、啼け、まだ啼かぬか、むねのうちの藍いろの、  
 盲目のこの鳥



安心できるやうな大きな溜息を吐かうとて背  
 延びしたれば、頭痛めり  
 冷ゆればすぐに風邪をひく、あはれにもたしか  
 なるわが皮膚かな  
 饑ゑて一片の麵麩をぬすまむとするごとくわ  
 が命の眼ひらけり  
 何處より來れるや我がいのちを信せむとつと  
 むる心、その心さへとらへがたし  
 眼をひらかむとして、またおもふ、わが生の日光  
 のさびしさよ

闇か、われか、眼ざめたる夜半の寢床をめぐれる  
 もの、すべて空し  
 何にもあれ貪ることに倦みて來ぬ、わびしや友  
 情にも  
 地の皮膚にさせる日光と、陰翳と、わがいのちの  
 繪具と、正午の新鮮  
 死人の指の動くごとく、わが貧しきいのちを追  
 求せむとする心よ  
 載るかぎり机に林檎をのせ朱欒を載せ、その匂  
 ひのなかに静まりて居る



机のうへ林檎とざぼんとのなかに小さき鏡を  
 置き、讀書の疲れを慰めむとす  
 三つ四つころがれる朱欒の匂ひに書齋は鬱々  
 として病めり、わが讀書  
 酒の後、指にあぶらの出でてきぬ、こよひひとし  
 ほ匂へ朱欒よ  
 今朝わが頭あたまは水晶のごとくに澄めり、林檎よ匂  
 へ、朱欒よ匂へ、二月この朝  
 ざぼんの實の黄にして大たいなる、りんごの實のそ  
 のそばにして悲しみて匂へる

みちのくの津輕の林檎、この林檎、手にとりてお  
 もふみちのくの津輕  
 酔うて居れ、酔うて居れ、ほんとうに酔うて居れ、  
 外目まへめをしながら心が斯う眩く  
 静座に耐へられなくなれば、ついと立つ、立つて  
 歩く、貧しい心そのもののやうに  
 人がみなものをいふうとましさよ、わがくちび  
 るのみにくさよ  
 盡くるなき怠屈たいくつのうちにあれかしと思ふ、死し人びと  
 のゆびの動く勿れかしと思ふ



わがたいくつの夜に慕ひきの啼なくが聞ゆ、雨もまば  
 らにわが心にふりそそぐ  
 疲れたるか頭よ、かすかに耳鳴りのする、耳鳴り  
 のする、いで床へいそがむ  
 空洞なるわがからだにも睡ねむ眠りをおもふ時の來  
 ぬ、したしき夜よ  
 何にもあれ、はや塗らむとぞおもふ、甕を溢るる  
 つめたき繪具、悲しき心  
 氣に入つた甕でもあらば、甕のかたちにはやな  
 りなまし、わがこころ

身ぶるひをする藍いろの小鳥、そのやうにわれ  
 の心も、いざ、身ぶるひをせむ  
 こころの闇に浸みる瀬の音、心のうつろに響く  
 瀬の音、瀬の音、瀬の音  
 溪の瀬のおとはいよいよ澄みゆき夜もふかめ  
 どいづくぞやわがこころは  
 もとめて得ざるものなしといへる人あり、すべ  
 て空しといふ人あり、群れるかな  
 死を感せよ、まことにひとり生けるごとき命を  
 感せよ、まことに感せよ



裂けばとてこの古甕になにももの入りてある  
べき入りてあるべき

### 海及び船室

一月初旬より二月初旬にかけ、九州の沿岸を一  
周せり、歌四十五首。

闇のうちにあまた帆ぞ鳴る、帆ぞ動く、わが汽船きせん  
の漸く動き出でむとする港に  
船室の窓よりやはらかき朝日きたる、いでわが  
いとしき麥酒を呼ばむかな  
濤よりの反射か、船室の朝日の揺るることよ、や  
はらかきことよ



身體は皮膚のみのごとくつかれたり、船室の窓  
よりかなしき朝日きたる

酒後の身を朝日が染め、船が揺る、甲板あゆめば

飛魚がとぶ

飛ぶ、飛ぶ、とび魚がとぶ、朝日のなかをあはれか  
なしきひかりとなり

太陽のこなたに帆が見ゆ、かげりて黒く死せる

ごとき帆

すれすれに岬の絶壁を過ぐ、わが船室の時計の  
おと

風出でて浪ぞ立つ、朝日いまだ低くして陰翳の  
み多き海に

わが顔にまともにさせる濃き朝日、船は揺れに

揺れ、濃き朝日

親船をはなるる舳、ゆらゆらと晝のみなとに浮  
びいでたれ

船のかがみにうつる額の蒼さよな、旅なるわれ  
の眼の痛さよな

朝の甲板にざあざあとして水そそぐ、濃き陽の  
なかの四五の萌黄服



防波堤に群れゐて市街のひとあそぶ、晝のみな  
 とにうかべるわが汽船(別府港三首)  
 解なるわれ等見つめてかき噤み真晝の波止場  
 ひと群れて居り  
 汽船おりてしき石踏めばしんしんと脳にぞひ  
 びく、晝のみなと市街  
 乗換驛、待ちゐし汽車に乗りうつる、窓にま白き  
 冬の海かな(小倉驛)  
 大海の荒の岸邊の浪のかげに人群るる見ゆわ  
 が冬の汽車

汽車の窓べに蜜柑の皮をむきつつも身をかき  
 ほそめ昨夜のこと悔ゆ  
 松の青さよ、とある悔をばおもひいで眼の痛き  
 とき、わが汽車の窓に  
 風たてば有明の海は大いなる白き瀬となるわ  
 が小蒸汽船よ  
 有明の海のにごりに鴨あまたうかべり、船は島  
 原へ入る  
 冬雲のかげりに暗き島、岬、憂き島原へわが船は  
 入る



船に乗り海を渡る、なんのたのしみぞ、船に乗り  
 縁えんもなき海を渡る  
 眼めに膜の張りたらむごとき心地して島原へ行  
 く船にわが在り  
 何のために此處には來にけむ、何處いづくに居るも心  
 になんの變りあるべき  
 島原は海にうかべるかなしみか、宿屋のてすり、  
 倚ればつめたき  
 島原の宿屋にこもり晝も出でず、ひとりしわれ  
 をはかなみて居り

あはれ此處にもはかなき記憶を刻まむとしは  
 かなき行ひをわがするなりき  
 風も風ぎゆふべとなれば有明の海はあぶらの  
 如し、憂鬱  
 うるはしく笑ふものかな、笑ふなかれ、わがさび  
 しさに相觸るるなかれ(遊女深雪)  
 箱崎の濱のしら砂ふみさくみ海のなかみち見  
 ればかなしも(海の中道は岬の名なり)  
 博多はくたなる冬の黒さよ、わが腫ひとみ、水の暗さよ、灯ひのつ  
 めたさよ



窓おほき醫科大學の教室に松のかけこそいと  
 さはにさせ(福岡醫科大學)  
 松原は海にかも似むそのかげの醫科大學の赤  
 き煙突

國ざかひ冬枯山のいただきを揺れまがりつつ  
 行けるわが汽車

櫻島はけむりを吐かぬ島なりき、あはれ死にた  
 る火の山にありき

梅寒き宿屋の二階、すみの部屋、夕日の薩摩明ら  
 けく見ゆ

酔ひざめのこころの水のごとかるに痛しや夕  
 日あかあかと浸む

海の黒さよ、ほそぼそとしてうかびたる佐多の  
 岬の夕日の濃さよ

浪高み船のあゆみの遅さよな、みさきの端はなの白  
 き燈臺

入りゆけば港はおもきらくじつに鷗のむれも  
 灰色に見ゆ

やよ窓に灯をとすなかれ、海はいま薔薇いろ  
 に暮る、やよわが黒船



やよ老人、いま船室には君とわれのみ我がさか  
づきをねがはくは受けよ  
船は揺るれども歩むともなし、窓に黒く月夜の  
陸が見ゆれども動かす

## 日向國耳川

あたたかき冬の朝かなうす板のほそ長き舟に  
耳川くだる

## 日向國美々津港附近にて

老人よ樂しからずや海は青しやよ老人よ海は  
青し青し  
岩をおこし松をこぐとす、老人のそのうしろ影  
その青き松  
あはれ悲し、いで衣服をぬがばやと思ふ、海は青  
き魚のごとくうねり光れり  
あまり赤く、あまりあまきこの蜜柑かな、海はを  
んなに似て青く動く日  
心のみいらだちて身はガラスの玉のごとし海  
は動く、ななめに動く



身ぞ染まる、青き笑、人魚の笑、海死にてわが眼石  
 のごとく盲しひたるに  
 絶壁せつぺきを這ひあがる、黒き猫とや見えむ、いまかな  
 しき絶壁を這ひ上る  
 とかくして登りつきたる山のごとき巨岩きよがんのう  
 へのわれに海青し  
 岩角いはかどよりのぞくかなしき海の隅にあはれ舟人  
 ちさき帆を上ぐ  
 孤獨よ、黒鐵くろがねのごときこの岩の上にあざやかに  
 我が陰翳かげを刻め

さかしくも孤獨のひとみの輝くことよ、黒鐵くろがねな  
 せる岩の間に  
 かなしくも海に濡れたるわがいのち、わが孤獨、  
 あはれ太陽よりかくれまほしき  
 悲しみに身もいらち、黒く巨おほいなる岩のかげに  
 尿いはりをぞする、青き浪の中に  
 うれし、うれし、海が曇る、これから漸く私わたしのから  
 だにもあぶらが出る  
 蜘蛛が海よりも大きく見ゆ、眼のまへに松より  
 さがりし蜘蛛



岬なる鬱憂の森、海は病み、ただ一羽かなしき鳥  
 まへり  
 身體は一枚の眼となりぬ、青くかがやける海、ひ  
 らたき太陽  
 岩のあひだを這ひて歩く、はだしで、笑ひて、浪と  
 われと  
 鵜が一羽不意にとびたちぬ、岩かげの藍いろの  
 浪のふくらみより  
 下駄をぬいでおいたところへ來た、これからま  
 た市街へ歸るのだ

岬の森よりしぶしぶ歸らむとすれば、港の市街  
 になしき汽笛鳴る  
 この帆にも日光の明暗あり、かなしや、あをき海  
 のうへに  
 水平線が鋸の刃のごとく見ゆ、太陽の真下の浪  
 のいたましさよ  
 太陽の具合で海がわが額の皺のやうに襞をつ  
 くる、呼吸の苦しいこの窓  
 わが窓の冷たさよ、海はけふ實にいく度か色彩  
 を變へけむ



少女よ、その蜜柑を摘むことなかれ、かなしき葉  
のかげの

ひややかに海より廣き帆の來りぬ、港の旅館の  
窓のまへに

微雨のなかに鳥まへり、海の蒼さ、冷たさ、やうや  
く夜とならむとするこの窓

光無き海、濃き藍色にたたへたり、雨晴れむとし  
て一羽のしろき鳥

闇夜の波は戀するをんなの指のごとし、小ラム  
プとわれとの窓のしたに

窓から下を見おろす、つめたい夜がうなじにも  
背にも

わがこころ、今し鶉のごとくかへり來よ、夜の窓、  
濤のひびきのみ満てるに

精力を浪費するなかれ、はぐくめよと涙してお  
もふ、夜の濤に濡れし窓邊に

闇に眼の馴れぬあひだの港の市街、戸出づれば  
濤の四方にくだくる

かなしき月出づるなりけり、限りなく闇なれと  
ねがふ海のうへの夜に



再び同じ所にて

とある雲のかたち  
に夏をおもひいでぬ、三月の  
海のさびしき紫紺  
春の日の眞黒き岩にあふむけにまろがりて居  
れば睡眠さしきたる  
太陽にあたためられしこの黒きおほいなる岩  
にいざやねむらむ  
白き猫そらになくがにあをうみの春日のかけ  
に啼き居る鷗

われ知らずうたひいだせるわが聲のさびしさ  
よ、春日紫紺いろの海  
淫慾は冷たかりけり、濃くうすくわが身のうへ  
に照りかけりする  
這ひあがり岩のかどより海を見る、さびしき紫  
紺、さびしき浪のむれ  
をちこちに岩のとがれる、陰翳おほき午後四時  
の紺の海となりにけり  
岩かどに着物かささき爪をやぶりきりぎしを  
攀づ、椿折るとて



潮引きてつかれはてたる岩かどにせまき海見  
 え浪のうごける  
 油なし浪ぞねばれる、曇り日の海に群れたる海  
 女のをとめ等  
 高まりたかまりつひに碎けずいきえゆきし曇  
 り日の沖の浪のかげかな  
 わが頬のかすかの熱や、小窓より海見てあれば  
 蝙蝠のとぶ  
 なみ高し、雨後の春日をはらみたる綿雲のかげ  
 にみさご啼くなり

石のごと首つきいだし二階なる窓に海見つつ  
 疲れはてにけり  
 げにながく見すありけりと海を見にうちいで  
 てきぬこころを運び  
 夜の海あぶらのごとく油繪のごとく孤獨をか  
 なしましむる  
 春のうみ魚のごとくに舟をやるうらわかき舟  
 子は唄もうたはず  
 海を見てあり、海に染められわがこころしばし  
 いろづく、海を見てあり



太陽を拜まむ、海もそらもひとつ色なり、いま太陽ををろがまむ  
 太陽をたのしめとふと心に言ひておどろきて涙ながれぬ  
 椿の花、椿のはな、わがこころもひと本の樹のごとくなれひとすぢとなれ  
 紺いろの干潮しほの海はわがこころの浅きにも似てももの憂かりけり  
 わびしき濱かな、貝がらのくづ砂のくづいざやひろはむ、海も晴るるに

夜の雨しじにふるなり、沖津邊はかすかにひかりかすかに光る  
 よるの雨そこともわかぬ海岸かみにほのじろき泡のつづくなりけり  
 わがたましひのはしに悲しく染まり居る海の蒼みよ、夜となりにけり  
 潮引きてあらはれし岩に鷗居り空みて啼けば下りくるたがあり  
 おのづから盲目めくらのごとく岩を踏む、海見れば湧くおもひさびしも



夕陽ゆふひに透き浪のそこひに魚の見ゆ、あるまじき  
 こと思ふべからず  
 黙然と岩を見つめておもふこと、ひとに告ぐべ  
 ききはならなくに  
 手に觸るるわびしき記憶にが苦き悔岩をめぐりて  
 浪ぞむらがる  
 古き繪の布きれのやぶれにのこりたるわびしき藍  
 の海となりにけり  
 日本語のまづしさか、わがこころの貧しさか海  
 は瘦せて青くひかれり

太陽かがやき引しほの海は羽あをき一羽の蝶  
 となりてうごかず  
 をんなの匂ひなりけり、ふと雲がわたれば海の  
 あをくかげれる  
 たらたらと砂ぞくづるるわが踏めば砂ぞくづ  
 るる、ある色のうみの低さよ  
 一灣ひとたぎの海の蒼みの深みゆきわが顔に来て苦痛  
 とぞなる  
 海もまた倦むらし、わが靈魂たまは曇らむとす、いづ  
 くに動き行かむとするや小蟹よ



木の葉にも盛れるがごとく海は小さし、わが命  
 燃え燃えて、一すぢの青き煙たつ  
 椿の木、椿の木、わが憂愁にきらきらとひらたき  
 海のうつりかがやく  
 天地創造の日の悲哀と苦痛とけふわが胸に新  
 たなり、海にうかべる鳥だにもなし  
 陰翳を知らざるかの太陽のひとりよりうまれ  
 て雲のおりてくるなり  
 けぶりなし揺れゆるる海の反映、陽は黄ばみわ  
 が顔の海の反映

ふと浪にむかひてうすく笑ひけり、あやふき岩  
 を降りはてしとき  
 浪のかげより顔をいだせる海女のあり、眼もあ  
 をあをと口笛を吹く  
 あら砂のすさめるころ蒼白み海にむかひて  
 うちうめくかな  
 海よかげれ水平線の黝みより雲よ出で来て海  
 わたれかし  
 岩かげの浪のひとつのふくらみに彼女のかほ  
 をゑがき淋しむ



わが顔の海の反映、一羽のかもめしらじらとし  
 てまひいでにけり  
 日光のかげのごとくにちらちらと海鳥あまた  
 むれとべるかな  
 鳥のおほさよちひさき波のたちさわぎ海あさ  
 あさとかげりきたりぬ  
 栖<sup>す</sup>めるかぎりのやどかりをみな殺しつくし静  
 けき岩になすよしもがな

酔  
 樵  
 歌

われも木を伐る、ひろきふもとの雑木原春日つ  
 めたや、われも木を伐る  
 春の木立に小<sup>よ</sup>斧<sup>き</sup>振ることのかなしさよ、前後不  
 覺に伐りくづしけり  
 さくさくと伐りてありしが、待てしばし、しばし  
 はものをおもはざりける  
 榎の木のしげれるかげに小半どきあまり小<sup>よ</sup>斧<sup>き</sup>  
 ふり伐りたふしける



春の木は水<sup>すゐ</sup>氣<sup>き</sup>ゆたかに鉦切れのよしといふな  
 り春の木を伐る  
 山柴の檜の冬<sup>ふゆ</sup>青<sup>あお</sup>木<sup>き</sup>のいろいろあるなかに椿ま  
 じれるかなしかりけり  
 椿の木は葉のしげければぼつたりとつめたき  
 音してつちにたふるる  
 わが伐りし木木のみだれてたふれたる青きす  
 がたを見てあるしばし  
 ややありて指にはまめのできてきぬもはやや  
 めむと木かげに坐る

青木伐り、つかれて村のむすめたち夜床のくし  
 きはなしをぞする  
 さびしさにむすめの群に入りゆけばひとりの  
 むすめわれにいふことに  
 峰高み海見をすれば春がすみをどめるをちに  
 青く見ゆかに  
 ながめ居ればかすみのをちに見えきたる海あ  
 り海のなかに島あり  
 あこの山この山粘土細工のごとくにも見えきた  
 るなり淋しみて居れば



人聲ぞとおもへば鴉にありにけり春日けぶれ  
 るみねの松山  
 見おろせばふもとに山の幾うねりうねれるに  
 みな松の生なひたる  
 をのへなる松の山こそ明るけれそのまつ山に  
 入りゆく樵夫さこり  
 そこかしこ山に老木の松をもとめ大まさかり  
 をふるふ男よ  
 そのそばに子どもと犬とがついて居り大まさ  
 かりを振るきこりのそばに

つぎつぎに伐り倒さるる松の木をながめて居  
 れば春日さびしも  
 どよめかしまつたく松のたふれ終りぬ大まさ  
 かりの汗ばめるかな  
 峯にのぼり鳥がねきけば春がすみ霞める四方  
 の悲しく光る  
 松の木の伐られしは杉の木の伐られしよりあ  
 はれ深かり春の深山に  
 鶯よ鶯よとて息ひそめ聞いて居りしがとびさ  
 りにけり



まつはるはかすみか松の脂の香か峯のとがりの春日かなしも  
 汗をさまれば霞つめたく浸みきたる峯の上の  
 午後にとほく海見ゆ  
 ひそひそと山にわけ入りおのづから高きに出  
 でぬ悲しや春日  
 春がすみこもれる山に啼く烏を驚かさじとわ  
 がこころ熱し  
 峯の上なる老木の松のひともとの枝のしげみ  
 につどふ春風

なにはあれ第一の峰にのぼらむとかすめる山の脊を歩み居り  
 深山わけ入り朽木の松のふしを掘るその松の節たいまつとなる  
 けむりありて山に野火燃ゆくもり日のひかれ  
 るそらを啼きゆく鳥  
 太陽のかげりてゆけば悲しみつ雲いでて照ればよろこびぬ峰のとがりに  
 わな張りてあたり見かへれば春の山しみらにつちの匂ふなりけり



わな見にとまだきに行けばおほいなる兎かか  
 り居りわれを見て啼く  
 わな張りしは椿のかげにありにけりうさぎか  
 かりて椿散り居り  
 霞に濡れて黒くつめたく山がせまる、窪地のし  
 げみに雉子待つわれに  
 かすんだ山にをりをり風が来る、樹が鳴る、わが  
 手の銃のつめたさよ  
 つつの音がわれとわがこころに響く、深夜の酒  
 のごとくひびく

我がかなしみに火をつけるやうに、地團太踏み  
 て鳥を逐ふなり  
 見知らぬ窪地の灌木原におりて来た、見廻せば、  
 見まはせば春の鳥啼く  
 傷つきて鳥かかりたる喬木に攀ちむとて走せ  
 寄れば、青き縦の樹  
 テーブルの上いつばいに枝はひろがり咲き群  
 がる躑躅、夜の青い瓶  
 ペンさきに滲み出づるインキ、ふと顔をあぐれ  
 ば顔をつつめるつつじ



赤いつつじの咲きみだれた夜のテーブルに洋  
 燈をつけて、すぐ消した  
 夜になれば健康の恢復して来るごときわが身  
 體、ラムプのかげの躑躅  
 黄色なつつじもあると思ふ、この血のごときつ  
 つじのほか、夜のテーブル  
 不眠症ととぎさぬ窓と戸外の闇と、ときどき机  
 に落つる赤い躑躅  
 わけとてはなくちだんだを踏んでよろこんで  
 みた、喜んだとてなににならうぞ

居るところを失くしたところがうつとりとか  
 なしい日光を見つめて居る  
 遠い麓に杉の木がまばらに立つて居る、人の生  
 にある悲哀のやうに  
 焼酎に蜂蜜を混ずればうまい酒となる、酒とな  
 る、春の外光  
 わがこころは極りなし、底もなし、ふたもなし、そ  
 の心先づありやなしや  
 萬葉集、いにしへびとのかなしみに身も染まり  
 つつ讀む萬葉集



人麿の歌をしみじみ讀めるとき汗となり春の  
 日は背せなをながるる  
 からくりめけるわれのころのはたらきのは  
 たと止まれり、雲雀うらうらら  
 この國に雪も降らねばわがころ乾きにかわ  
 き春に入るなり  
 菜の花のほひほのかに身にも浸む二月の日  
 とはなりにけるかな  
 乾きたる庭にたまたま出でて立てば黄きいろき蝶の  
 まひて來にけり

穴すだらけのわが心のその穴すにこの穴すに小鳥が  
 眼めを出しびいとなき、びいと啼く  
 くにふくめば疑ひもなきこのうまさやめら  
 れぬ酒の悲しかりけり  
 どうせ斯かうなりア棟木むねぎを外はせえんやらさ柱はしらひ  
 きぬけそれえんやらさ  
 藍あゐ甕がめに顔をひたしてしたしたたる藍を  
 見ばやとぞ思ふ  
 鶺鴒せいらが雲雀うらうらの聲によく似るところに言ひて  
 あふぐ春の日



家出てみればそらには雲雀やまに墓春が悲し  
とひたなきになく  
氣がつけばこの春ははまだ椿を見ずくれなる  
の花をさびしくおもへり

なまけ者

なまけ者がふと氣まぐれに芹つみに出でて嘆  
きぬあはれ春よと  
あはれこは野蒜なりけりあをいろのほそなが  
き草の野蒜なりけり

不孝の兒を持てる老人の心に暫しの安息も  
なし二首

春あさき田じりに出でて野芹つむ母のころ  
に休ひのあれ  
餘念なきさまには見ゆれ頬かむり母が芹つむ  
きさらぎの野や  
曇日のかすみのなかに鳥啼き鶺鴒啼き溪にの  
ぞみてこの窓の高さよな  
やがてして耳のかゆきに耳をかくわが身をつ  
つむ春の光線



身體のうち眼の玉ばかり何として斯く重きや  
 らむ慕ひきなく春日  
 指見れば指ばかり眼めとづれば眼ばかり、春のひ  
 なたに蝶が群れとぶ  
 さまざまに指を動かし眼めとち眼めをあけあやし  
 きものにわれを思へり  
 ちつと忍んで見て居れば、墓が啼く、大きな咽喉  
 をあけて春の日に啼く  
 オヤ、そこにも啼く、なかに椎の樹二三にさん本ほん、けらら  
 けららと墓啼きかはす

墓ひきの眼めのかなしさよ、つまが戀しとひたなきに  
 啼くその墓の眼  
 踏めばくづるる山の赤つち、乾いた土、どこにし  
 のんで墓の啼くぞえ  
 ほろほろとつちのくづれて墓の啼く、きりぎし  
 の春のつちのわれめに  
 水甕づに烙やきつけられしつめたい青い裸體畫の  
 やうなわがこころ  
 觸れなばただちにものをばわれのいろに染め  
 む火のごとき心燃えたたず居り



なやましき匂ひなりけり、わがさびしさの深き  
 かげより鱗ふりて来る  
 をんなが濡れた繪具のごとくそばを通る、つめ  
 たいさびしい春の一日  
 我がうてるうさぎ雉子の肉つねに厨の釘に絶  
 えざり、春暮れかかる  
 夜ふけの厨にうさぎの股をさきとりて火にあ  
 ぶるとき、きたれる孤獨  
 朝の圍爐裡猫もとりわけあまゆるをあやして  
 あれば啼けるうぐひす

しとしとと春の雨こそ地には降れ居るとしも  
 なきわがころかな  
 けふも雨ふる、蛙よるこびしよぼしよぼに濡れ  
 て櫻も咲きいでにけり  
 ねられぬままに起きて机の椅子に凭る、家をつ  
 つめる夜の雨かな  
 春雨にみかさまさりて谷ぞこを石のながるる  
 ねざめてぞ聞く  
 春の日のぬくみかなしも、ひたすらに淺瀬にた  
 ちて鮎つり居れば



瀬の鮎子わが瘦脛もきよらかに寒みいたみて  
 春はゆくなり  
 鳥うちのかへさは夜となりにけり山ざくらさ  
 へうちかざしたる  
 すずしげに顔の感覺はたらけり、のちのつかれ  
 をおもはずもがな  
 不眠症のラムプのかげのわが夜明、瓦たたきて  
 雨ふりしきる  
 はりつめし力をふといま感覺のうへに知る、お  
 もひでのわびしさよ(おもひで三首)

キスを否める時そむけし癖の横顔の冷たさの  
 いま身には沁みぬれ  
 わが重き帽子をとれ服をぬげ、思ひ出のなかの  
 悲しき女よ  
 夜の蝶のこの濃ねずみのなつかしや、このいろ  
 なせる帽子かぶらむ  
 いだ釣ると春の川瀬につどひたるふるさとび  
 とら黒き衣着る  
 わが好きはこの灌木の原なれや、高くそびえて  
 かげる樹もなし



くだらぬものおもひをばやめにせむ、なにか匂  
 ふは屁臭へくさ蔓かづらか  
 たべものせるにや指の荒れやうようす青き  
 枝に山椒を摘む  
 山に栖めば煤はつかねどわがころつちくれ  
 のごと乾きくづるる  
 闇のなかに動く葉のあり音ぞする窓さへ濡る  
 る春の深夜よひに  
 海いろにうちかぎり居りかづら取るとてわが  
 ひとり入る尾鈴の山は

縦に這ふ青きかづらよそのかづら取らむと縦  
 をのぞみつつ行く  
 いとながきかづらにありけり青きかづら引け  
 ども引けども盡きむともせず  
 春の日や老いしかづらのあをあと葉をつけ  
 て居り青かづら引く  
 いとながく青きかづらをわれの引く身うちの  
 ちからこめてわが引く  
 ぬすみする人のごとくにひそひそと深山にひ  
 とりかづら引くなり



わが身十あまりあはせてなほ足らぬふとき  
椀なりよきかづら生おふる  
かづら生ふるは山の北かげ春の日にほひも  
さむき山の北かげ  
青かづら籠こにみちみちぬいまはとてかへらむ  
とすれば山も暮れにき

瀬戸内海

瀬戸の海や浪もろともにくろぐろとい群れて  
くだる春の鱒さくらは

瀬戸はいづれも瀬となりたてるひき汐の午後  
なり六十五噸の小蒸こじ汽やう船ふね

明石人丸神社

をろがむや御はしに散れるひとすぢの松の落  
葉もかりそめならず  
ありし日はひとしほ松のしげり葉の繁くやあ  
りけむ君をしぞおもふ  
袖かざし君が見にけむ島山にけふ初夏の日ぞ  
けぶりたる(淡路島見ゆ)



嵯峨清凉寺

はつ夏の雲は輝き松風吹く嵯峨の清凉寺せいりやうじにけ  
 ふ詣で來ぬ  
 罌粟サシの實のまろく青きがそよぎ居り清凉寺よ  
 りわが出で來れば  
 清凉寺の築地ついでくづれし裏門を出づれば嵯峨は  
 麥うちしきる

遠江辨天島

濱つづき夏のおほそらはるかにて立つしら浪  
 のけぶりたるかな



秋  
風  
の  
歌



私の著してきた歌集に、「海の聲」「獨り歌へる」「別離」(前の二集より選抜し更に新作を加へたるもの)、「路上」「死か藝術か」「みなかみ」があつた。今また昨春以來の作數百首を輯めて本集を編んだのである。さうするたびごとに、私は不識のうち小休みなく移りゆく我が生命のすがたをまたあたりに見る思ひがして、一種言ひ難い感想にとらはるるが常である。さきには、歌は直ちに我そのものであつた。今でも無論我を離れての歌は一首もない。然しその間に、單に生命の表現または陰影であるといふより、われとわが生命を批評して居る如き傾向を生じてきたと思ふ。のみならずそれは單なる批評にとどまらずして、われとわれに對する希望や嘲笑や、要するにその向上發展を促がしてゐる

### 自序



ものと思はるる。われとわれを生んでゆくに要する一の力であり、その道程であると謂つてよいと思ふ。  
 本書の校正に従事してゐる間、どうしたものか私は今までになくしみじみと時のちからを感じた。刻々に來り、過ぎゆく時といふものが自分の血や肉と終始してゐるのをまざまざ見てゐる如きを感じて、思はず慄然とした。さうして、顧みて自分の歌に對し今までと異つた可憐しみと力とを感じ、同時に自己に對し、歌に對し、悲しい嫌厭咀咒の情を覺ゆる事實に従來に見ぬものがあつた。とにかく、私はいままた此處にこの集を残して、更に新たな歩みを續けて行かねばならぬ。希くば留めしものに光あり、我が行くてに光あれと祈りながら、さびしい校正の筆を擱く。

若 山 牧 水

### 夏の日の苦惱

我が赤兒ひた泣きに泣く地もそらもしら雲と  
 なり光るくもり日  
 ああつひにあか兒は泣<sup>なき</sup>をやめにけり妻の乳く  
 びに喰ひいりにけむ  
 膝に泣けば我が子なりけり離れて聞けば何に  
 かあらむ赤兒ひた泣く  
 なに故に泣くかよ吾兒<sup>わがこ</sup>やすやすやと寢入れば  
 あはれ吾兒なるものを



ことさらに泣かすにや子に倦みしにやかたは  
 らにゐて手もやらぬ妻  
 妻はしたにわれは二階にむきむきにちさき窓  
 あけくもり日に居る  
 片手のばせばとなりの屋根にとどくなりわれ  
 の二階のまどのくもり日  
 或時は寝入らむとする乳呑兒の眼ひき鼻ひき  
 たはむれあそぶ  
 啼きまよひ鶯こそ一羽そらにまへくもり日も  
 われも流れ流るる

一枚の亞鉛とんがねのいたのうす板のきらめき光るわ  
 がこころかな  
 太陽のありかもしらすひたぐもり曇りかがや  
 き窓あけかねつ  
 風くもり蛇の如くに煙這ひ屋並やなみのたうちわが  
 窓をとづ  
 ほろほろと遠く尺八なりいでぬこのくもり日  
 のまどのいづれぞ  
 涙さへ出でぬ眼なりけりみちばたの石のごと  
 くもとぢし眼なりけり



油なすものうさつらさほてほてとからだほて  
 れど空を見てをり  
 うつうつと浮かずなげかすかなしまぬこのこ  
 ころ何にならむとすらむ  
 梅雨雲の空に渦まき光る日はこころ石とも冷  
 えてあれかし  
 憂鬱は體すえてかたなくなりにけり蜘蛛の兒と  
 なり這ひ出でよこころ  
 あやふきはこころなりけりゆらゆらに甕もたひにま  
 たく満ちてうごかず

大いなる呼吸い一つ吐かむねがひにて曇りにお  
 もき窓はひらけど  
 夏深いよいよ瘦せてわが好むつらにしわれ  
 の近づけよかし  
 雑草ざさうに花咲くごとくいまのわが唇くちびるより聲のた  
 えず出づるも  
 すたすたと大股にゆき大またにかへり來にけ  
 り用ある如く  
 わが顔は酒にくづれつ友がかほは神経質にく  
 づれるにけり



踏みもせよなげうちもせよしかはあれ折れく  
 づれむちから今はわれになし  
 とりあぐる事なかれいまはわがこころ疊のち  
 りにまみれをはりぬ  
 べつべつとつばきしにけりわが舌になにかほ  
 こりのたまれるごとく  
 くまもなく探りまはれど指の先頭のなかに觸  
 るるものなし  
 おほいなるばいぶ買ひたし大いなるばいぶく  
 はへて睡りてありたし

折しもあれ借金とりが門をうつくもり日の家  
 の海の如きに  
 わが皮膚に來て濡るる煤煙そのごとくひとり  
 を悲しむ心燃えをり  
 しくしくと額に汗湧き手足にわきあぶらの如  
 し腐れる海の如し  
 時は來ぬ飯をくらへと鳴りいづる市街の汽笛  
 曇りたるかな  
 曇り日の光の中に蝸なきて汗ひややけきわが  
 身をめぐる



## 水明君と淺草にあそぶ、歌三首

七月のあさくさの晝いとまばらにひとが歩め  
 りわれがあゆめり  
 あさくさの會我の家五九郎のばかづらに見入  
 りてなみだながすなりけり  
 鼻のさきにたまれるつゆは何ならむわがもの  
 うさが泣けるなりけり

## 山蘭君とともに酔ふ、歌二首

朝まだき夏の市街のかたすみの酒場に酔ひを  
 れば電車すぎゆく  
 夜ふけし夏の銀座のしきいしのつめたきを踏  
 みよろぼひあゆむ  
 木綿蚊帳わが見ひしひし泣きいづるあかつき  
 とはやなりにけるかな  
 東京の七つ八つなる小娘の眼の小伶俐さわれ  
 とあそばず  
 いつしかに頭かたぶけ晝のまどとほき電車を  
 聞いてゐにけり



兒をあやすとねぢをひねればほつかりと晝の  
 電燈つきにけるかな  
 わが窓の四方しほうにからむ電線は蜘蛛のやぶれ巢  
 けふも曇れり  
 ものいはぬ我にすすむるうす色の晝のひや酒  
 妻もかたらず  
 大木たいぼくの群れて暗きをおもひいで植物園に行か  
 むとぞ思ふ  
 植物園にゆかむと思ひ憂しと思ふ晝の電燈と  
 もりたる部屋に

わが頸のみじかきことを悲しみぬおほいにわ  
 れをののしらむとし  
 横濱に行かずやといへば言ことは無く帽子をとり  
 てさきに立つ友  
 停車場の大扇風器ひぐさ向日葵ひまわりのごとく廻れり黙もくせ  
 る群衆ぐんしゆに  
 廢驛はいえきにならむといへる新橋の古停車場の夏の  
 群衆  
 指もてつまめば汗ぞしみらに光り居りはだへ  
 さびしや蟬啼きやます



くもり日に啼きやまぬ蟬と我が心語らふ如く  
 おとろへてをり  
 わが立つや夏の市街のつちほこり麩麩の匂ひ  
 に似て渦をまく  
 追ふことを我慢して見むと思ひ立てば蠅くま  
 もなくわが顔を這ふ  
 あはれ身はうしほ腐れる海ぞこにむぐれる魚  
 か汗湧きやます  
 燻りけぶれる晝の日ざしにかきつぐみ瓜をた  
 づねて夏の街いそぐ

瓜屋なる主婦よく肥えみせさきに晝の電燈と  
 もりゐにけり  
 手にとればたなごころより熱かりき晝の市街  
 のみせさきの瓜  
 かきつぐみうましともなくやめもせず大いな  
 る瓜喰みてわがをり  
 あまからず酸くさへあらぬ大いなる瓜をはみ  
 つつものを思へり  
 しとしとに汗は湧けどもうちつけに暑しとも  
 なく萎え居るなり



瓜食<sup>は</sup>めばそことしもなく汗<sup>あせ</sup>しみ晝のやぶ蚊の  
 身をなきめぐる  
 ものうしやあまりに瓜をはみたれば身は瓜に  
 似て汗ばみにけり

秋日小情

音に澄みて時計の針のうごくなり窓をつつめ  
 る秋のみどり葉  
 夕かけて照りもいだせる秋の日にさそはれて  
 家を出でにけるかな  
 郊外や見まじきものに行き逢ひぬ秋の櫂を伐  
 りたふし居り  
 かの櫂あはれならずや秋風にい群れて蟬の啼  
 きも入りたる



秋の葉の日に光るかなひそひそと急ぐははや  
 も散りしきりつつ  
 かなしきは日の光なり秋の樹にしとどに青葉  
 散りしきりつつ  
 今はとて穴にいそげる秋蟲のつめたきこころ  
 憎みかねつも  
 秋の森に蝶こそ一羽まひ出でたれやがて青葉  
 にとまりてうごかず  
 すずかけの落葉ひろふとかいかがめば地の匂  
 ひてまなこ痛めり

すずかけは落葉してあり吹くとしもなき秋風  
 のあさの路傍に  
 玉に似てこころふとしも静まりぬ路傍のおち  
 葉踏むに耐へむや  
 わがこころの底ひにも物を見むとするさびし  
 さのなかにけふもこもれり  
 死にゆきしわが戀ごころを繪の如くながめて  
 ゐしがやがてかなしき  
 食はむとてしばしおきたるうす青の林檎に蜂  
 のとまりゐにけり



くだものの皮を離れぬ秋の蜂ちさきをみつ  
 涙ぐみける  
 秋の夜栗の話のなかにしてふとふるさとの母  
 おもふかな  
 母ひとり拾ふともなく栗ひろふかの裏山の秋  
 ふかみけむ  
 養樹園をさなき木々のもみぢしてうちつらな  
 りて散りてゐるなり  
 大いなる鋏の手とめ園丁はわれに木の名を教  
 へけるかな

朝ぐもりはれゆく空に風見えてさびしさに酒  
 をわがのめるかな  
 静ごころしづかに居よとさしぐまれまなこう  
 つして見やるさかづき  
 梨の果の舌ざはりさへうとましきわが静ごこ  
 ろわが朝の酒  
 いつしかに夏はすぎけりきりぎしの赤土原に  
 蟻の這ひをり  
 いつしかに夏はすぎけりただひとり野中の線  
 路われの横ぎる



きれぎれに市街の上に雲散れりつめたきかな  
 や夏のおとろへ  
 おそ夏の草葉のほねのかたきにもこころいら  
 だちあざけりをおぼゆ  
 脚ひとりちからをおぼえかぎりなく歩まむと  
 する晩夏の野や  
 たたずみて蟻に見いれるわがすがたごうごう  
 と汽車かたはらをすぐ  
 わびしさや何をうらみつなに悔ゆるおそ夏の  
 雲のちれる夕ぞら

或る時は落葉の如くものわびしくもの憂く眸  
 をとづる小犬よ  
 此處はしも窪地にあればひややかに土ぞにほ  
 へる來よ來よ小犬  
 或る時はあはれを乞へるをとめ子のなみだの  
 如く眼をあぐる犬  
 かにかくに静かに眠れこころより満ちたらひ  
 なば起きておもへよ  
 ひややかにうすらにわれに聞ゆるは若き盲目  
 の歩む杖の音



あめつちにわが身ひとりの凭る机ひややかに  
 しも待ちてあれかし  
 夜の雨なれがこころはいづくぞとわが身つつ  
 みて降りしきるなり  
 しみじみとあふげば夜の雨のつぶいづれか胸  
 にしまざらめやは  
 ねがはくはひらたき板にふるごとくわれのこ  
 ころに降るな夜の雨  
 村雨のちとの晴間をはれやかに街に日の照り  
 わが出で歩む

公園にわがごときもの入りゆきてにほへる街  
 の兒等みるは憂き  
 知る人も無けれ電車のかたすみにしづかに重  
 き眼をとぢにける  
 今はみにくき我がこころかな瞳さへ錆びたる  
 針となりて動かす  
 眼ひらけば紙の障子があかあかと夕日に染み  
 て風もきこゆる  
 秋風のゆふべのそらにひとものけやきの梢  
 吹かれて立てり



夜の雨にぬれゆく秋の街並木ぬれつつわれも  
 歩みてをりき  
 絶望といひ終焉しゅうえんといひ秋の日のダリアの如き  
 言葉のかずかな  
 おやおやと思ふ心に昨日すぎけふも暮れけり  
 ものうき日かな  
 老人のましてをんなのせせこましき心をなん  
 と拾うてをられむ

### 秋風の歌

おはれ悲しこころダリアの花を折り倦める心  
 をとりよそはばや  
 くつきりと秋のダリアの咲きたるに倦める心  
 は怯えむとする  
 黙然とダリアの花に見入りぬればこころしば  
 らく晴れてゐにけり  
 園丁は黒き帽着一心にダリアの蟲に取り入  
 りて居り



たけたかきダリアの園にほそほそと吹く秋風  
 は雨の如しも  
 園丁の黒帽子よりなほ高くそびえて風に咲い  
 てゐるなり  
 分秒ぶんびょうと時間を惜しむころもち重きまぶたを  
 瞑つぶぢむとはする  
 顔色のややに赤きは健康かこの倦みごこち何  
 の故ぞも  
 苦くるき木の根をひねもす噛みて居りぬべしこの  
 蒸む心地こちやるよしもなき

わが額がくの瘦せおとろへに似もつかずつめたき  
 あぶらにじみたるかな  
 秋の樹の濡れて窓をばつつめるにこころいら  
 だち煙草をぞ吸ふ  
 ものをもひ戸ざさずあれば秋の日の風はわが  
 頬の熱吸ひてゆく  
 風もなき秋の日一葉また一葉おつる木の葉の  
 うらまるるかな  
 紙の障子にせまきガラスのはめられつ冷たき  
 秋の庭園ていゑんの見ゆ



雨まてる窓べに雨のふりて來ぬ今は身を投げ  
 やすらかにあらむ  
 空のそこひに赤みを宿し夕雨ゆきのさと落ちてき  
 ぬわが細き窓に  
 藍色の風のかたまり樹によどみ郊外の秋ふか  
 みたるかな  
 秋木立光りたわみて大風に吹かるる見れば額ぬか  
 あれにけり  
 日に白みとほき林を吹く風のさびしいかなや  
 四方よちをとざせり

群れて散る風の葉を見よわが胸ゆもぎとる如  
 く火のごとく散る  
 灰のごと風に光りつ空たかくまひもあがりて  
 群れて散るなり  
 なか空にちり立つ木の葉ひそひそと秋の木立  
 をわれは過ぐなり  
 骨みと肉のすきをぬすみて浸みもいるこの秋の  
 風しじに吹くかな  
 いとどしく心あやふく傾きてやぶれむとする  
 に風風ぎにけり



おほらかに風無き空に散りてゐる木の葉なが  
 めて窓とぞすかな  
 夜の讀書は海に青魚あそなのあそぶよりかなしいか  
 なや風の聞ゆる  
 寝さむれば折しも風の過ぎゆきつむなしきひ  
 びき残るなりけり  
 いたづらに咽喉のあたりに呼吸いきをする生物の  
 如く寝ざめてありけり  
 わが居るは風のゆくへにあるごとく呼吸を引  
 きつつきいてゐたりき

吸ふいきの吐く呼吸いきのすゑにあらはるるさび  
 しさなれば追ふよしもなし  
 生きてるもの死にたるもののけじめさへ見わ  
 かずなりて涙こぼるる  
 きりきりと齒さへ痛めどこのこころとりなほ  
 しえでつかれはてにけり  
 なまごころややに温ぬくみて身にかへりさいはひ  
 にして事もなかりき  
 こころさへなま温あたたかく吸ふいきもおほらかにし  
 て睡眠ねむりぞきたる



ぼとぼと油の如くわが臉にねむりひそかに  
 這ひ寄りにけり  
 とぢし窓いらだつこころけはしきに耐へつつ  
 風を聞いてゐたりき  
 しみじみとおとぎ嘶をかたり合ふ兒等ありき  
 街路の夕やみのなかに  
 秋霧の茄子のはたけに人居りきやがて車を曳  
 きて去りにけり  
 すがれつつ落ちゆく秋の木の葉よりいたまし  
 いかなわれの言葉は

乏しきを拾ふが如くをりをりに鏡とりいでつ  
 らをながむる  
 齒にかめど苦きつゆさへ出でて來ぬ秋の木の  
 葉となりはてにけり  
 ひとびとの顔のつめたく見えわたるけふのつ  
 どひの家を吹く風  
 古時計とまれる針の錆びはててむなしきかた  
 をさしてゐるなり  
 健康よとくわれの身にかへれかし見よ秋の樹  
 々の葉のちりかひを



齒も碎くるばかり一氣に噛みしめむよろこび  
 事にいまだ會はなくに  
 ばらばらと夜の障子を打つ雨におびやかされ  
 て戶外に出でゆく  
 つめたきは風にありけりわがこころ白布の如  
 く吹かれたるかな  
 いまだかつておもふがままにとぢしことなか  
 りし如く眼を瞑ぢにけり

### 病院に入りたし

わがちさきまどに隣れる病院のガラス障子は  
 いつも閉れり  
 午砲鳴るやけふは時雨れて病院のえんとつの  
 煙濃くたちのぼる  
 病院の二階の廊下をりをりに通ふ看護婦と顔  
 なじみせり  
 白き帽子白き衣着しをとめ等の群れて笑へり  
 ガラス戸ごしに



白樫の山茶花のやや茂りたるちひさき庭の病  
 院のまど  
 病院の廣きガラスの照りかへし赤き夕日の散  
 れる冬の樹  
 わがすめる二階の窓と病院の小高きまどのあ  
 ひの冬の樹  
 午後の日の窓にまはれば今日もまたかの看護  
 婦はカーテンをひく  
 カアテンを引く音くるくるくると冴えつ  
 つ窓に夕日は赤し

いそぎ足廊下を通ふ看護婦をガラス戸ごしに  
 ながめてぞ居る  
 ガラス戸ごし顔なじみなる看護婦の笑ふにわ  
 れも笑ひてゐたり  
 はらはらと時雨ふる日の病院の二階のガラス  
 にうつる看護婦  
 ものかげに眠る如くにおくふかく病院に入り  
 ねてもあらまし  
 病院に入りたしと思ひ落葉めくわが身のさま  
 にながめいりたる



病院のつめたきまどべ薬の香記憶に湧きてそ  
れもなつかし  
病院にそれこれの人を見舞ひたる記憶をあつ  
めたのしみて居る  
そこもわろし此處も痛むとせかせかと身うち  
のやまひかぞへても見し  
椋の葉の青くつめたき一瓶のくすりもがもな  
飲みて眠りぬむ  
病院に入りたしとねがふこのごろの身をかへ  
りみるはあはれなりけり

とりとめて病めりともなく櫛の葉のまばらに  
染まるころなるらむ  
病院のこのみ思ひ居しがふとわが手のよご  
れに氣づき洗ひにと立つ  
焼く如き苦きくすりを飲みたしとこころ黄ば  
みてねがふなりけり  
をりをりに死にゆきし友を指折りてかぞへつ  
つこころ冷えてゐにけり  
四邊みなつめたき日なりわが心の疲勞衰弱を  
のみ思ひてをれば



病院の重げの扉ときどきの開閉をみてたのし  
 みてゐき  
 物いはぬ笑はぬ人のおほくゐる家とし思ひそ  
 の窓をみる  
 知る人のたえてなかれかし病院の臥床ベッドの上の  
 われとならしめ  
 新しき身ともなりなむ古びたるわれの五體を  
 薬もて焼き  
 東明しやうめいのあをきひかりのさすごとくながくねむ  
 りて眼ざめ來らむ

静けさをこひもとめつつ來にし身に落葉木立  
 は雨とけぶれり  
 目も重く落葉のこすゑ見上ぐれば櫛の木立雨  
 とけぶれり  
 あぶらなし空にけぶれる落葉らくえつの櫛も冬の太陽  
 もよし  
 おち葉焚くけむりの中に動けるはをみなか男  
 かとほき木の間  
 おち葉焚くをちこちの煙わがこころもうつら  
 うつらと煙るなりけり



## 秋風の海及び燈臺

東京靈岸島より乗船、伊豆下田港へ渡る

ほてり立つ腫かき眠ち乗合客の臭きにまじり  
 海に浮べり  
 電燈は卵つぶせし臭氣して船室に赤くともり  
 るにけり  
 夜風寒み豚のいばりを煮るごとき船室にこも  
 り伊豆に渡るなり

寝たふれつ死人めきたる乗合客のはだへはだ  
 へにひびく夜の濤  
 ことごとと機關のひびきつたひくる秋風の海  
 の甲板の椅子かな  
 蛙なすちひさき汽船あき風の相模の海にうか  
 びるにけれ  
 伊豆の海や入江入江の浪のいろ濁り黄ばみて  
 秋の風吹く

伊豆の岬に近づきしころ、風雨烈しく船まきに覆らむとす



どどと越ゆる甲板デキの大なみ船室ケビンには五十のひ  
 との生きてゐるなり  
 ひたひたと濤はわが頬をなめて過ぐ船室の窓  
 に怒るわが頬を  
 走りかね蛙の如く這ひゐつつ汽船ボートくだくるも  
 死ぬまじとする  
 いつ知らず涙ナミしみ居り今ここに死なむかと思  
 ふ心のうへに  
 雲さけて落日レイジツは海に漏れにけり赤きにうかび  
 濤の立つ見ゆ

あはれ陸ク見ゆ白なみがくれ岩も見ゆ死ぬまじ  
 死ぬまじ汽船ボートは裂くとも  
 屍シカハネに鳥よる如く夕ぐれの伊豆の岬に白き浪立  
 つ  
 はたと停り動かざること岩に似るあらしの海  
 のわがゑびす丸  
 ふと時計の振子とまりし如くにもこころ冷え  
 きて暴風雨ハルカウを見るなり  
 ゑびす丸デキ甲板デキふみたたきゑびす丸つひに下田  
 に入りにはけらすや



下田港より燈臺用便船に乗りて神子元島に  
渡る、一木なき岩礁なりき

船は五挺櫓漕ぐにかひなの張りたれど濤黒く  
して進まざるなり  
大濤の蔭を漕ぐとき手もぬれず船はいはほと  
動かざりけり  
船子よ船子よ疾風はやちのなかに帆を張ると死ぬる  
如くに叫ぶ船子等よ  
白刃なし岬並みなる疾風はやちの海にわれの小船は  
矢の如くなり

大うねり押ししかたむきて落つるときわが舟も  
魚とななめなりけり  
次のうねりはわれの帆よりも高々とそびえて  
黒くうねり寄るなり  
鯨なすうねりの群の帆のかげに船子等は金か屬ね  
と光りるにけり  
われとわが筋を噛むごと胸いたみ帆柱ぞひに  
立ちて浪見る  
ましぐらに浪にとび入り鰭あをき魚とならむ  
と心はやるも